

文学にあらわれたダーウィニズム

フランスにおけるダーウィニズム受容とゾラ「ルーゴン＝マッカール叢書」

宮川 朗子

I はじめに

1859年に発表されたダーウィンの『種の起源』は、のちにダーウィニズムとなる思想の原点であり、それは生物学におけるパラダイムの変換をもたらしただけでなく、広く社会一般においても支配的な思想となっていた。そしてそのうちとりわけソーシャル・ダーウィニズムと呼ばれる現象については、従来各分野において大いに論じられてきた。¹⁾しかしそこで常に問題となっていたのは、それが果たして純粋にダーウィンの表明した理論に基づいているのかどうかということであった。そしてダーウィンの思想の受容の在り方は、個別の現象を検討する際には常に重要な鍵となってくるものであった。

文学におけるダーウィニズムの影響を考えると、とりわけその受容は作家の想像世界とその力を知る上でも大きな問題となってくる。ギルマン・ピアの『ダーウィンのプロット (Darwin's Plot)』は、19世紀のイギリスにおいて、ジョージ・エリオットやトーマス・ハーディがどのようにダーウィンから影響をうけ、作品の中でどのようにダーウィニズムを表現していったかを詳細に論じたという点で、この問題を論じた代表的なものといえよう。またこの時代、進化論から生まれた楽観的な進歩思想を背景にもつ文学も多く生まれている。例えばウィリアム・モリスの『ユートピアだより』やエドワード・ベラミーの『かえりみれば』といったユートピア文学がある。また、その後間もなく進歩の楽観性を批判して表れたザミャーチンの『われら』やオルガス・ハクスリーの『すばらしい新世界』、ジョージ・オーウェルの『1984年』といったアンチ・ユートピア文学は、ダーウィンへの言及はもはやみられないものの、それがすでに時代の支配的傾向となっていたダーウィニズム、そしてそこから派生した進歩思想に対する一回答となっ

いたことは十分に推測されるものとなっている。

ところで、これらの作家たちとはほぼ同時代に属し、彼等と同様ダーウィニズムの洗礼を受けたエミール・ゾラがいる。ゾラの場合、その作品におけるダーウィニズムの影響の強さは、これまで多くの研究者が指摘してきた。²⁾しかし、それらはみな作品分析にとどまり、実際その影響は直接ダーウィンから来るのかどうかを明らかにしないまま終わってしまっていた。また、作品から「生存競争 (lutte pour la vie)」や「弱肉強食 (les forts mangent les faibles)」といったダーウィニズム的用語を拾い出すのに終始し、ゾラの表現したダーウィニズムの性格に触れていないといううらみがあった。

本稿ではこのような従来の研究の欠陥を補うべく、ゾラがどのようにダーウィニズムを受容し、さらに受容したものをどのように作品のなかで展開させていったかということについて考えてみたい。

II フランスにおけるダーウィニズムの受容とゾラのダーウィニズム理解

まず最初に、フランスにおいてダーウィンがどのように受容され、それがゾラのダーウィニズム理解とどのような関係があるのかをみてみたい。19世紀のフランスにおけるダーウィンの受容については、イヴェット・コンリーの『19世紀フランスにおけるダーウィン主義の導入 (L'introduction du darwinisme en France au XIXe siècle)』に詳しい。³⁾この研究の結論は、ダーウィニズムはフランスでは受容されなかったということであり、これは、今日フランスのダーウィニズム受容について言われている常識と一致する。そして、ダーウィニズムが受容されなかった理由として1. キュヴィエの主張する種の不変説とそれゆえに考えられる突然変異説（ここには聖書の大洪水による生物の一掃と新たな種の誕生が下敷きとなっている）が強力なパラダイムとして存在しており、「自然は飛躍せず」という漸進的な進化をとくダーウィニズムの考え方が導入される余地がほとんどなかったこと。2. ラマルクの要不要説は進化において生物自体の「意思」を重視するものと考えられていたが、キュヴィエと同様強力な進化の理論であったこの説は、自然、すなわち環境が生物の進化の大きな決定要因となると考えたダーウィンの理論と相容れないものであったこと。3. 従来フランスでは実証主

義の伝統が強く、ダーウィンの『種の起原』は具体的に証明することが不可能なものとしてとらえられた、ということがあげられる。⁴⁾

ところで、ここにあげた理由は確かにダーウィンがフランスに受容されなかった説得力ある説明となっているとはいえ、同時にそれはダーウィンの『種の起原』が受容されなかった理由と限定されるともいえないだろうか。つまり、いわゆるソーシャル・ダーウィニズム、さらにそれは世俗化された「生存競争」や「弱肉強食」といった概念が受容されなかったという説明とはなっていないのではないだろうか。ソーシャル・ダーウィニズムの代表とさえるスペンサーの研究の方が『種の起源』よりも先に発表されたことや、またダーウィン自身も『人間の由来』を書いたのはスペンサーの影響があったことを認めているのはよく知られた事実である。こういった些細な事実関係からでも、もう一度我々がダーウィニズムと呼んでいるものに対して再検討して見る必要が生じてくるだろう。

さらに文化人類学の立場からは、社会の進化に関する興味深い考え方が提供されているが、これはダーウィニズムについて新たな解釈を許してくれる。中根千枝は『タテ社会の力学』の中で、生物の違いが遺伝子の差異によるように、社会も何か遺伝子のようなものをもって、それによって他の社会との相違を示しているのではないかと述べている。⁵⁾ 公文俊平は「社会の進化について」において、さらにこの中根の説を説明し、「社会構造」が中根のイメージする「遺伝子」に相当するもので、それが、「なるべく不変のままで世代から世代へ伝えていくような仕組みをもつシステムだ」⁶⁾と述べている。ゆえに、「社会構造」の表現型である社会そのものの様相は、各社会間で似ていたり異なっていたりするが、それはあくまで表層のレベルの問題なのだということになる。だから、ある複数の社会について比較検討するときは、この「社会構造」こそを問題にしなければならないだろう。この両氏の意見は社会の進化の過程や各社会間の相違を遺伝法則的に考えたものであるが、これは、ダーウィニズム受容についても当てはめられるのではないだろうか。つまり、ダーウィンの『種の起源』という「遺伝子」があり、それが伝えられてはゆくが、その受容先であられるものはダーウィニズムであって必ずしも『種の起源』とは一致しないのである。もちろん一言でダーウィンの理論とくっつけてしまってそれを「遺伝子」としてしまうのは横暴であり、ダー

ウィンのどの部分が「遺伝子」となっていたのかということはまず検討されなければならないだろう。とはいえ、『種の起源』という「遺伝子」と受容によって表れた「表現型」とが異なるからという理由で、ダーウィニズム受容がなされなかったとは必ずしもいえないのではないのだろうか。確かに生物学の領域では当時のフランスでは、先に挙げたような理由からダーウィンは受容されなかったのかもしれない。しかしそれは、あくまでも一学問分野に限られた話であって、世俗化された場では、それは形を変えて勢力を延ばし、社会の広がっていったと考えられるのではないだろうか。

ゾラの作品に現れたダーウィニズムも、このような文脈において見るとダーウィニズムの一表現型として興味深い一例となる。というのも、ゾラが直接ダーウィンの研究を読み、その理解したところをかきとめた形跡は残されていないものの、特に『ボヌール・デ・ダム百貨店』以降、「生存競争 (la lutte pour la vie) や弱肉強食 (les forts mangent les faibles)」などのダーウィニ的な用語が多く使われるようになってきており、小説の展開も、これらの言葉に表されるようなテーマに従っているように思われるからである。⁷⁾ここで、ゾラがどこからダーウィンのメッセージを受け取り、それを消化し、作品の中に取り込んでいったかを順に追って検討してゆきたい。

おそらくゾラがダーウィニズムとして理解したものは、エミール・ド・ラヴレイユ『現代の社会主義』(*Le Socialisme Contemporain*)」の中の記述からであろう。この著者ラヴレイユはキリスト教的社会主義の立場から、当時問題になっていた賃金鉄則に対して批判しているものである。またこれは単に社会主義思想についての記述というだけでなく、スペンサーの説く個人主義に立っての自由競争に対する批判があった。この著書の第4版以降には付録としてラヴレイユの批判に答えるスペンサーの文章が載せられているので、ここに社会主義者とソーシャル・ダーウィニストという対立の図式が明らかになる。コレット・ベッケルによるとゾラが用いたのは2版か3版とのことなので、⁸⁾彼がこのスペンサーの批判を読んだとは思われない。とはいえ、この研究の随所にみられるソーシャル・ダーウィニズムの批判から、この社会主義とダーウィニストとの対立は十分読み取れる。というのも、すでに序論の、

ダーウィンによると、生物間で進歩は完了する。なぜなら環境に最も適したものが生存競争に勝って進歩をもたらすからである。最も強いもの、最も勇敢なるもの、最も武装されているものが少しずつ最も弱いもの達を蹴落とし、こうしてますます完璧な種に発展してゆくのである。〈中略〉自由競争にあって最も抜け目のない者が勝利するのだろう。それがダーウィンの望むところなのだ。〈中略〉強者のための場、なぜなら力が権利となるからだ。ダーウィニズムと社会主義は全く違う言葉をもつ。⁹⁾

というところでラヴレイユ自身がこの対立関係を明言しているからである。さらに、彼はダーウィニズムの性格を、

最も強いものが経済世界を掌握するのだ。そしてその最も強いものとは一番金をもっているものことなのだ。¹⁰⁾

マルサスはダーウィンの先駆者である。¹¹⁾

集産主義者はダーウィンを罵る。彼等はだから生存競争の世にあるならば、最も整った組織が形成されることで、競争は最終的になくなるというに違いない。¹²⁾

「我々の唯一の目的は国家を崩壊することだ。これこそが完全な社会、すなわち人類が到達点へと向かう自然法則の自由で多産な働きによってもたらされあろう。」これはフランス、イタリア、スペインの社会主義者達の間ですます支配的な傾向にある考えである。実証主義とハーバード・スペンサーの影響は明らかだ。¹³⁾

と説明している。注13にあげた引用はおそらくアナーキズムのことだと思うが、とするとそこに実証主義やスペンサーの影響があるとみるのはおかしいだろう。それはともかく、ここにあらわれたダーウィニズムは、明らかに社会化されたそれであり、ダーウィニズムは単純かつ明確に生存競争、適者生存、自然の法則(=弱肉強食)という言葉で言い表されている。

ここに書かれていたものについてゾラは、

社会主義の敵であるダーウィン：人間の社会は自然の流れに任せる論理的な法則に支配される。自然主義的な楽観主義。正統的経済学：自由放任。ダーウィンの理論を適用しようとする社会主義者達の盲目ぶり。〈中略〉自由社

会になってから昔の保証責任は存在しない。今や「生存競争」である。¹⁴⁾ 社会主義は競争を攻撃する。競争は人を殺し、給料を最小限に引き下げるものだ。一斉蜂起は勝利を収めると、それに続いて新しい社会は法律によって確立すると思うような妄想。¹⁵⁾

と書き留めている。これだけでゾラがほぼラヴレイユと同じ意味でダーウィニズムを理解していることがわかるだろう。ゾラの残した他の作品や記事、ノート類にはダーウィニズムの社会的側面のみならず科学的側面に関するものもある。しかしそれはゾラの創作活動においてソーシャル・ダーウィニズムのように小説作法に影響してくるものではなかった。それは、この場合とはまた違った性格もつものだと筆者には思われるのでここでは特に言及しない。¹⁶⁾ 以上のように検討したノート段階でのゾラのダーウィニズム理解がどのように作品化されてくるのか次章で見てゆきたい。

IV 「ルーゴン＝マッカール叢書」

— 『ジェルミナル』と『ボヌール・デ・ダム百貨店』 —

「叢書」のなかで直接ダーウィンに言及しているのは『ジェルミナル』と『パスカル博士』のみである。このうち後者は、主人公パスカルの遺伝の研究がどういう経緯を経て来たかということを説明するためにダーウィンの名前だけがだされている。それゆえダーウィンについてのゾラの理解が伺えるのは『ジェルミナル』に限られる。

エチエンヌは今やダーウィンに到達した。彼は5スーで買った本に要約されていた通俗化された説の断片を読んだ。そしてこの中途半端な理解で彼は生存競争の革命的な思想を形成した。痩せた人間が肥えた人間を食べる。力強い人間が青白いブルジョワジーを飲み込むのだ。しかしスヴァーリンは激怒し、ダーウィンを受け入れる社会主義者の馬鹿さ加減をわめき散らした。奴は科学的不平等論の喧伝者だ。例の選択とやらは特権階級の哲学にはおあつらえむけなのだ、と。¹⁷⁾

それではダーウィンは正しいのか？彼は自分の知識に満足し、はっきりと決断を下す男であるけれども、この問いには当惑した。しかし、ある考えが彼

の疑念を晴らし喜ばせた。それは、もし彼が最初に話すことになったら、その理論の彼なりの説明を再び行うことであった。もしある階層が食い尽くされる必要があるのなら、一掃頑強で新しい人民が享楽に疲れたブルジョワジーを食い尽くすのではないだろうか。新たな血が新たな社会を作るのだらう。¹⁸⁾

前章であげたラヴレイユの著作は、『ジェルミナル』創作の際の重要な文献になっているだけあって、ここに現れたダーウィン理解もゾラがこの著作からとったノートがほぼ忠実に再現されているとってよいだろう。そしてここでさらにクローズ・アップされている「弱肉強食」や「生存競争」はプロットの上にも現れてくる。それはまず登場人物の設定から始まるが、この時点ですでに「強者」「弱者」は描き分けられ後の「生存競争」の結果はすでに暗示されている。つまり、「生存競争」は同じスタートラインから始まるのではなく、すでに競争者の間に逆転が不可能なほどの差がつけられている。ゾラはしばしば社会的決定論について語ったが、まさにこの「差」はその好例であろう。ここでその一例として『ジェルミナル』における炭鉱で働く少女と、その炭鉱の所有者の娘の描写の対比をみてみよう。この作品のなかで、炭鉱で鉱車を動かす仕事をしているカトリーヌ・マユは、

15歳にして華奢で、彼女は下着からでているのは手足だけだったが、青みがかかった足は石炭で刺青をしたようで、か細い腕は乳白色をしていて、それは黒い石鱗で洗い続けたせいで青いしみのついてしまったその顔と対象をなしていた。最後にあくびをして、少し大きめに口をあけたが、そこには貧血症のような青白い歯茎に見事な歯が並んでいた。灰色の目は眠気と戦って涙をながし、苦しくて疲れ切った表情を浮かべると、彼女の裸体全体の疲れはさらに増してゆくようだった。¹⁹⁾

と設定されている。それに対し、炭鉱の所有者の娘セシル・グレゴワールは、彼女は美しくはなかった。非常に健康で、体調もよすぎるくらいで、18歳でもう成熟した女だった。しかし彼女は素晴らしい体つきをしていて、しばらくたての牛乳のように新鮮で、栗色の髪をし、その丸顔には頬の間に沈んでいる意思の強そうな鼻があった。毛布は必ず落ちていたが、彼女は非常に穏やかに息をしていたので、この歳にしては重く豊満な胸をその吐息でさらに

ふくらめることはなかった。²⁰⁾

カトリーヌの身体が炭鉱労働のせいで青みがかってしまっているのに対し、セシルは乳白色である。さらに、この両者の起床の場面はすでに前者が病気に冒されているのに対し、後者は健康そのものであることを表わしている。つまりこの二人の少女は彼女らが属する社会の行く末そのものの明暗もすでに示してしまっているのである。これは、カトリーヌの祖父ボンヌモールの描写を見るとき一掃明確になる。50年間炭鉱で働き続けた彼の顔は「鉛のような青白さで、青みがかったしみが点々となっていた²¹⁾」と描かれ、石炭の混じった黒い痰をはいている。炭鉱で働き初めて数年のカトリーヌにはまた体に白い部分も残されているが、この全身が鉛のようなボンヌモールの描写をみると、その白さもやがてはきえゆく運命にあることを予感させるのである。

一方、『ボヌール・デ・ダム百貨店』の方はどうだろう。『ジェルミナール』における描写の差異が階級の差に呼応しているのに対し、この作品では百貨店と小売店という商業形態の区別になっている。それは、人物よりもむしろ店の描写に表れている。最終的に商業戦争に破れて破産するボーデュの店、ヴィエイユ・エルブーフは、

一階にあるその店は天井に押しつぶされているかのようで、わずかな高さしかない中二階をかかえ、牢屋のような半月形の入口があった。建物の木造部分、そのうちの看板の色は、長い年月を経て黄土色や正歴色に微妙に変化してしまっていた。右側と左側には、奥行きのある薄暗くて埃っぽいショーウィンドーがあり、そこには、積み重ねられた布地があることがかろうじて認められた。ドアは開いているが、都下倉庫のような湿気た闇に面しているかのようだった。²²⁾

と描写されている、それに対し勝者ムーレの店、ボヌール・デ・ダムは、

高さのあるドアはガラス製で、金箔を張り巡らした装飾の迷路の真ん中にあたる中二階までそびえ立っていた。寓話に出てきそうな二人の人物像、それは二人の微笑みを浮かべた女性像で、あらわな胸をそらし、「ボヌール・デ・ダム」という看板を広げている。〈中略〉その発展は終わりが無いかのように思われたが、そこから目をうつすと、一階の陳列台と中二階の一点の曇もないガ

ラス窓があるので、そこから売り台の内側の仕事が見えるのである。〈中略〉野外の通りや歩道の上にさえも、廉価な商品の地滑りが起きそうで、ドアは魅惑的に、通りをゆく客を立ち止まらせる機会を伺っている²³⁾のである。

ここでの対立関係も明らかである。いやむしろそれは対立というよりもあらかじめ決められている勝者と敗者の対比である。「中二階」や「看板」という共通の材料を使いながら、それがポーデュの店では、一階を押しつぶしそうな存在で、変色してしまっているのに対し、ムーレの店では、中二階は重さを感じさせず、下からドアがつき上がるように設置されている。さらに看板は金箔をふんだんに使い、魅惑的に客にアピールしている。

この2つの物語の冒頭をみると、ゾラは最初から勝者を明るさや白い色で表わし、敗者を暗さや黒っぽい色調で描写していることがわかる。このように描き分けることで、あらかじめ勝者と敗者を予告し、もうすでにこの時点でそれを決定してしまっているのである。物語の展開をみると、『ジェルミナール』にも『ボヌール・デ・ダム百貨店』にもいくつかの事件が折り込まれていることに気付く、これらの事件は、この勝者と敗者の違いを際立てるものでしかない。次のページの図はこの2作品の物語の展開をごく簡単にまとめたものである。

まず『ジェルミナール』では1部と2部をかけてたった一日の労働内容を説明している。それは単調で厳しい炭鉱夫の労働や日常生活が、あたかも機械の歯車の一つとして作動しているかのように描かれている。つまり、定められた労働時刻に従って働き、炭鉱内を往復するエレベータや水をくみあげるポンプの動きにしたがって働くことになり、まるで鉱夫達は時間や機械に動かされているような印象を与えているのである。そしてこの単調さと激務の悪循環を打ち砕こうとするかのように、四部のようなストライキや六部のような憲兵との衝突といった事件が起きるのだが、最初の部分で描かれた炭鉱夫たちや株主などの支配階級の人間に人物描写における差異がすでにその運命を予告していたように、労働者達の反乱は常に鎮圧される運命にある。最後にヴォー抗が崩壊しても、この支配被支配の関係は逆転せず、彼等の占める社会的地位も何も変わらない。

それに対し『ボヌール・デ・ダム百貨店』では、『ジェルミナール』の階級的強者と弱者の関係は、商業戦争での勝者と敗者の関係に呼応するが、結果はさら

に残酷となる。具体的な「闘争」は七章のロビノーとの布の価格競争やブーラスとの傘作りの技術とその価格競争に表れているが、表に示したとおり、ムーレの成功は彼の店を拡大させ、それにともなって、負けていった小売店は次々に破産する。13章はそれゆえ興味深い。ここにはボーデュの娘ジュヌヴィエヴとボーデュ婦人の葬式がある。この二つの葬儀の参列者は、親戚のドゥニーズをのぞいてすべて、百貨店に顧客をとられ破産した、あるいは破産寸前の商人たちである。それは百貨店に対する小売りという商業形態の葬式ともいえるだろう。この物語において、ムーレの勝利は完全であり、個人商店の商人たちはその街区から消え、そこに存在することすら許されないのである。

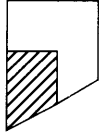
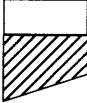
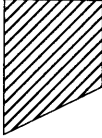
このように単純化されたゾラのダーウィニズムは、前章で挙げたような断片的な記述の中よりも、小説のプロットの展開の上にははっきりと現れてくる。『ジェルミナル』と『ボヌール・デ・ダム百貨店』はしばしば「叢書」において二項対立的な作品として挙げられるが、ダーウィニズムというフィルターを通して考えたとき、両者とも全く同じ法則の下に展開しているのがわかる。つまり、ゾラの作品においては常に物語の冒頭部分で場所と人物の設定があるが、この設定そ

物語の展開

『ジェルミナル』

1866年			1867年			
第1部	第2部	第3部	第4部	第5部	第6部	第7部
<ul style="list-style-type: none"> 1866年3月 炭坑の町：景色 	<ul style="list-style-type: none"> 会社の歴史 坑夫とその家族の日曜日のすごし方 	<ul style="list-style-type: none"> 4月→7月→8月、仕事になれるエチエンス。 10月末、とある土曜日：給料日、工事費を給料から引かれる。 	<ul style="list-style-type: none"> 12月1日。会社、給与システムをかえる。 ↓ 12月15日、ストライキ。 翌年1月：ストライキ続行。 	<ul style="list-style-type: none"> 炭鉱夫の間起きた対立。働こうとする坑夫に対する妨害。 ↓ 激化：炭鉱夫の女房の一群、食料品店襲う。店主メグラ殺害される。 	<ul style="list-style-type: none"> ジャンラン兵隊を殺す。 ストライキ中の炭鉱夫と憲兵衝突 	<ul style="list-style-type: none"> 2月 スヴァーリン、防水用の羽目板を壊す。 ↓ ヴォール坑崩壊。→救済活動：ボンヌモールセシルを絞殺。 4月、エチエンス、モンヌーを去る。
		<ul style="list-style-type: none"> 坑夫住宅の描写 炭坑での労働（ヴォール坑内の描写。入り口から、最も深い坑までエレベーターの動きに従って紹介。分業化された炭坑労働。一日の労働時間割の紹介） 	<ul style="list-style-type: none"> ストライキ決行の気運高まる。 			

『ボヌール・デ・ダム百貨店』

	1864年	1865年	1866年	1867年	1868年	1869年
	1, 2, 3, 4章	5章 6章	7章	8章 9, 10, 11章	12章	13章 14章
ボヌール・デ・ダム	<ul style="list-style-type: none"> 10月10日、冬の新作ファッション大売出し。総売上げ：87742F10。 	<ul style="list-style-type: none"> 夏期閑散期。(7月20日、ドゥニース解雇される) 	<ul style="list-style-type: none"> 7月→5月：拡張工事。 	<ul style="list-style-type: none"> 5月、落成式と夏の新作ファッション大売出し。総売上げ：587210F30 7月～拡大、新正面設置工事。→ ボヌール対ブーラスの競争。 12月、ボーデュランブイエの別荘を売る。→ボヌールとの競争。 		<ul style="list-style-type: none"> 2月、白布市。総売上げ：100247F95
小売店		<ul style="list-style-type: none"> 9月、ロビノー店を開く。 			<ul style="list-style-type: none"> 11月、ジュヌヴィエーヴの死。 ロビノーの自殺未遂。 	<ul style="list-style-type: none"> 1月、ホーデュ婦人の死

注) 図中の四角形はボヌール・デ・ダム百貨店が占める面積をあらわす。

のものがそれ以後展開する物語の「弱者」と「強者」を決定してしまっているのである。そしてこの決定の下に、あらゆる場面における「闘争」において、「弱者」は常に「強者」に圧倒される運命にある。

この二つの物語の展開は「叢書」最終巻の『パスカル博士』における家系樹の説明にも呼応する。パスカルが家系樹の前に同じ家系にありながら消滅する枝にある者、そうして消えていくものをまるで肥やしとして勢力を延ばしているかのようにますます栄えるものがあることを見て、生存競争の厳しさをかみしめる場面に対応する。

そこには家系樹の最後の小枝がある。一番最近生えた青白い茎で、太い枝の力強い樹液が上がってくることはできないようだ。幹の中に虫がいて、それが今は実にまで移り、それを貪ろうとしているのだ。しかし決して絶望してはいけない。家族は永遠に変転してゆく。〈中略〉ほら、地面いっぱいにはった巨大な根のことを思い浮かべてごらん。頂上で絶えずうねりをあげている葉の海で、生命を次々に生み出す永遠の息吹きの下で、他の葉と混じり

あっている一番上の葉が繁栄し続けていっているのを見てごらん。そうだ。希望はここにある。外からやってくる新しい血によって種が日々再構成されてゆくところにあるのだ。²⁴⁾

『パスカル博士』は20巻に及ぶこの「叢書」を要約している物語とも見られているが、この場面でのルーゴン家、マッカール家の人々の「生存競争」はまさに『ジェルミナル』や『ボヌール・デ・ダム百貨店』において適応された「生存競争」の法則とその展開に呼応しているといえよう。さらに、この場面においてゾラが「遺伝子」としてしか受け取っていなかった、遠い昔の読書の記憶でしかなかったダーウィンが、ここにきて非常に鮮明な形で表れたのである。ここで『種の起源』からの一節を紹介しよう。

同じ綱に属する全ての生物間の類縁は、時として一本の大きな木に表わされてきた。私はこの例えが大いに真実を物語っていると信じている。緑色の芽を出しかけた枝は現存する種を表わしているのに対し、それ以前に生まれてきた枝は絶滅してしまった種を表わすことになる。成長の各時期において、全ての成長しつつある小枝はあらゆる方向へ枝を出そうとしてきた。そして、種や種の集まりが、大規模な生存競争において、他の種を圧倒してきたのと同じやり方で、それを取り囲む小枝や枝の上になち、枯らせようとしてきた。²⁵⁾

先ほど引用したパスカルの家系樹の説明は、ダーウィンが全生物間の類縁関係を一本の木に例えたこのやり方に驚くほど似ている。これは単にゾラがやはりダーウィニズムの影響を受けていたのだという証明になるだけでなく、『パスカル博士』の主人公でありゾラ自身ともみなされうるパスカルに語らせているところに意味がある。すなわち、パスカルの生涯をかけた研究はゾラ自身の思想でもあり、そこにダーウィンが入ってきているのである。それゆえにゾラ作品においてダーウィニズムは単なる作品のテーマにとどまるものではなく、小説作法やその哲学にもかかわってくるものなのである。先程、作品の展開を追いながらプロットがダーウィニズムの法則に支配されていることを見てきた。しかしそれはゾラが小説の展開をその法則に従わせたのではなく、取りつかれていたといっただいほどゾラ自身がダーウィンに支配されていた、いやダーウィンになってさえいたからだといえないだろうか。そしてさらに、ゾラはダーウィンになっただけでなくそ

の理論を独自の表現方法で表わしている。家系樹を見て見よう。『ボヌール・デ・ダム百貨店』で闘争の結果が面積で示されたように、この家系樹においても、伸びゆく芽と枯れてしまった枝との違いは明確である。そして『ボヌール・デ・ダム百貨店』の面積の奪い合いはここでは樹液の奪い合いとなって現れ、伸びゆく芽はあたかも枯れてしまった芽を肥やしにしたかのようにますますその勢力範囲を延ばしていったのである。

V おわりに

以上、ゾラのダーウィニズム理解と作品への影響をみてきた。もはやフランスにおいて『種の起源』が受容されなかったことを理由に、この国にダーウィニズムが存在しなかったとはいえないだろう。そしてまたゾラのダーウィニズム理解はとても興味深い道筋をたどっている。すなわち、まず最初に若き日の読書があり、その後違う分野、すなわちソーシャル・ダーウィニズムを批判した社会主義思想の書物の熟読が、ダーウィニズムを急速に社会化させ、『ジェルミナル』のような作品の具体的な材料にもなる。そしてこのソーシャル・ダーウィニズムを理解し、作品化してゆく作業の中で、『パスカル博士』にみられるように、遠い昔の読書の記憶が再びよみがえってきている。この過程をたどるとき、我々はゾラの「ルーゴン＝マッカール叢書」においてここで取り上げたようなソーシャル・ダーウィニズムの系譜をもつ作品と、『獣人』のように生物学的進化論を背景にもつ作品が混在している理由が理解できるだろう。²⁶⁾

そして、ゾラが作品の中で展開させたダーウィニズムは非常に機械的であることがわかる。すなわち最初に「弱者」と「強者」の設定があり、後は何回か事件をもたらすことで、その度に後者が前者を圧してゆくという単純な展開である。これはおそらく『居酒屋』のジェルヴェーズの人生の転落をみるとき、その萌芽をみとめることができるが、『居酒屋』の場合、本論で取り上げた2作品のような「強者」と「弱者」の設定がないゆえにそれをダーウィニズム的展開と呼ぶことはできない。おそらく『ボヌール・デ・ダム百貨店』以降の作品からこのダーウィニズムの枠組みが当てはめられることになる。

さらに本稿では特にソーシャル・ダーウィニズムにしばって検討してきたが、

同時代の他のダーウィニズムの影響を受けた作品と比べてみると面白い特徴があることに気付く。²⁷⁾ゾラよりもダーウィンに対する意識は希薄ではあるものの、ウィリアム・モリスやエドワード・ベラミーなどが描いたユートピア社会は、確実にダーウィニズムから派生した進歩思想の上に立っているし、またそのすぐ後のザミヤーチン、オルダス、ハクスリー、ジョージ・オーウェルといった作家達は、そういった楽観的な進歩思想に対する強い懐疑から、際限のない進歩は強力な国家体制を築きあげ、個人を厳格に取り締まるイデオロギー社会を生み出すのに他ならないことを説いている。本論からはそれるので、ここでそのことについての詳しい分析はさけるが、こういった作家達が進歩思想から感じ取ったものは、人類を一つのものに向かわせる強いイデオロギー性である。すなわち、ダーウィンがしばしば彼の「過ち」とみなされた『人間の由来』の中でほめかしてしまった猿から人間への直線的な進歩観、あるいはスペンサーがその思想のなかで表明してきた「進歩」という尺度ですべてを測ってしまう一元的な価値観が行き着くところに対する夢想であり危惧である。こういった統一へのイデオロギー性は、ゾラの創作活動においては晩年にその傾向が現れるものの、本稿で検討してきた「ルーゴン＝マッカール叢書」の段階ではほとんどその性格はなく、ただひたすら無目的な闘争である。そしてその闘争の勝者と敗者はあらかじめ作品の冒頭に示されており、物語は具体的な闘争がある度に両者の社会的地位や財産の差を大きくしてゆくことによって展開される。『ボヌール・デ・ダム百貨店』はその最も著しい例であった。商業戦争の結果は常に面積と店の売上げによって示されていた。その時ゾラはマルクスとは違う意味でのマテリアリストとなる。数字と面積への執着、それはゾラのダーウィニズムの表現手段であったのである。

註

- 1) 例えば村上陽一郎編『時間と進化』(1981), 柴谷篤弘・長野 敬・養老孟司編『講座進化2 進化思想と社会』(1991) 鈴木善次他『進化論受容の比較科学史的研究』, 平成2・3・4年度科学研究費補助金研究成果報告書(1993)
- 2) ゾラの作品におけるダーウィニズムの影響については, 多くの研究者が指摘している。Jean Fréville, *Zola, semeur d'orage* (1952) Alain de Lattre, *Le réalisme selon Zola* (1975) Geoff Woolen, *Le darwinisme chez Zola : reflex ou reflexion?* in., *Cahiers de l'U.E.R.Froissart* (1980) Robert J. Niess, *Zola et le capitalisme : le darwinisme social*, in., *Les Cahiers Naturalistes* (1980) などが代表的なものとしてあげられる。
- 3) 現在までにこの本を入手することはできなかった。この研究については, 寺田元一「フランスにおけるダーウィン『受容』—フランス科学認識論の視点から—」(『進化論受容の比較科学史的研究』所収)を参考にした。また最近PUFより『ダーウィニズム・進化辞典 (Dictionnaire du Darwinisme et de L'Evolution)』が三巻本で出版された。参考まで付記しておく。
- 4) ここにあげたフランスにおけるダーウィニズム受容については, 1) にあげた文献及びマドレーヌ・バルテルミ=マドール『ラマルクと進化論 (Lamarck ou le mythe du précurseur)』(1979) (横山輝雄, 寺田元一共訳, 朝日出版社, 1993年) Th.A.ドッジ, L.G.ウィルソン他著『進化思想のトポグラフィ (Dictionary of the History of Ideas)』(1968) (渡辺政隆, 浜口稔他訳, 平凡社, 1987年)を参考にした。
- 5) 中根千枝『タテ社会の力学』, 付記2参照。
- 6) 公文俊平「社会の進化について」, (『時間と進化』所収), 231頁。
- 7) アルマン・ラヌーは『ボンジュール, ムッシュー・ゾラ』の中で, ゾラが, 1864年にクレマン・ロワイエが訳したダーウィンの著作(『種の起源』)を貪るように呼んだと書いている (Armand Lanoux, *Bonjour Monsieur Zola*, p.103)。またアラン・ド・ラットルはこの当時のゾラのダーウィン理解はクロード・ベルナル『実験医学序説』が下敷きになっていることを指摘している。(Alain de Lattre, op. cit., pp.114-115) 確かに1860年代中頃はゾラが科学的な研究を読みあさった時期である。しかし, この時期ゾラに強い影響を与えたのは後に「ルーゴン=マッカール叢書」構想する際に大きな役割を果たしたプロスペル・リュカスの『自然遺伝に関する哲学的・生理学的論考 (Traité philosophique et physiologique de l'hérédité naturelle)』であり, あるいはルトゥルノーの『情熱の生理学 (Physiologie des passions)』であった。さらにラヌーは, ゾラの弟子のセアールによると, ゾラがクロード・ベルナルのは確かに60年代のことであったが, そのころはそれほど夢中にはならず, それを熟読したのは十数

年後の『実験小説論』執筆の時であったとっていたことを紹介している (Lanoux, op. cit., p.103)。いずれにしても、この時期ダーウィンを読んだとはいえ、他の研究と比べて直接ダーウィニズムの理論を自分の創作に取り込もうとした形跡は見当たらない。ダーウィンがゾラの作品のなかで大きな役割を果たしてくるのは、本論でこの後のべるように、1880年代、『ボヌール・デ・ダム百貨店』以降のことである。

- 8) éd., par Colette Becker, *Emile Zola La fabrique de GEMINAL*, p.425.
- 9) Emile de Laveleye, *Le Socialisme Contemporain*, introduction p.XVIII.
- 10) *ibid.*, p.XXIV.
- 11) *ibid.*, p.140.
- 12) *ibid.*, p.198.
- 13) *ibid.*, pp.216-217.
- 14) éd., par C. Becker, op. cit., p.425.
- 15) *ibid.*, p.426.
- 16) ゾラの作品に現われた科学的 (あるいは生物学的) 意味でのダーウィニズムの関してここでごく簡単に触れておく。例えば丹治愛は『実験小説論』について、この中でダーウィンは名前のみ言及するにとどまっているとはいえ、そこにはこのエッセイの理論的支柱となっているクロード・ベルナルやプロスペル・リュカスとともにダーウィンの理論が入ってきていることを指摘している。(丹治愛『神を殺した男』, 115-123頁) また、作品については、ダーウィンを直接用いているというのではなく、特に遺伝に関する記述の中にその影響が見られるものが多い。例えば科学的決定論に基づいている『テレーズ・ラカン』, ロンブローゾの生来性犯罪者の理論を用いた『獣人』がある。また『パスカル博士』では、パスカルが自分の遺伝の研究を説明する際にダーウィンの名をあげている。ちなみに、このパスカルの遺伝理論はリュカスの『自然遺伝に関する哲学的・生理学的論考』が下敷きになっているが、この研究はダーウィン以前であるとはいえダーウィン自身も『種の起源』の中で言及しているだけあって、ゾラのノートからもダーウィニズムとしてとらえられうる記述が多く見られる。(参照: Emile Zola, *Les Rougon-Macquart*, Bibliothèque de la Pléiade, tome V, pp.1692-1735) 以上を要約すると、『実験小説論』の場合のように実証主義的な性格が強いものは大体エッセイに限られ、小説ではそれよりも登場人物の遺伝の設定の中にダーウィニズムの性格が現われている。その遺伝の描写においてゾラ特有の小説美学が見られるのである。
- 17) Emile Zola, *Les Rougon-Macquart*, tome III, Bibliothèque de la Pléiade, p.1524 (尚以下この全集に関しては、RMと記し、巻数はI~Vで表わす。
- 18) *ibid.*, p.1589.
- 19) *ibid.*, pp.1143-1144.
- 20) RM III, p.1196.

- 21) *ibid.*, p.1138.
- 22) *ibid.*, pp.393-394.
- 23) *ibid.*, p.390.
- 24) RMV, pp.1017-1018.
- 25) Charles Darwin, *The Origin of Species*, J.M.Dent & Sons LTD., London, 1958.
- 26) 『獣人』にはもちろんダーウィニズムが下地になっていると考えられるが、直接使った資料はチャーザレ・ロンブローゾの生来性犯罪者の研究である。ゾラはロンブローゾの『犯罪者論』の読者であり、『犯罪人類学雑誌』の予約購読者でもあった。(参考: Pierre Darmon, *Médecin et Assassins à la Belle Epoque - La médicalisation du crime*, Seuil, 1989, 鈴木秀治訳『医者と殺人者』新評論, 1992年)
- 27) 序論であげたハーディやジョージ・エリオットも比較の対象としてあげるべきかもしれない。しかしギルマン・ピアの研究に明らかのように、この二人の作家が着目した点は人間のルーツへの言及、種の進化と退化などの問題であった。ゾラの作品の中でこの系譜に位置付けられるものは『獣人』である。従って本文で説明したとおり、これらは生物学的な意味でのダーウィニズムに関するものと考えられるので本稿では検討しない。